

# シンガポール日本人学校チャンギ校における国際理解教育

前シンガポール日本人学校小学部チャンギ校 教諭

北海道北広島市立緑ヶ丘小学校 教諭 小林 圭

**キーワード：英会話、現地校交流、外国語活動**

## 1. はじめに

シンガポールは、ほぼ赤道直下に位置し、アジアの各所と中東、欧州、オーストラリアを結ぶ海上交通の貿易拠点として古くから栄えた。現在も貿易、工業などを主産業とし、東南アジアにおける経済、金融、交易の中心地となっている。

1年を通じて日中は30℃を超え、蒸し暑い天候が続き、色とりどりの花や緑の木々を楽しめるとても美しい国である。

国土面積は719km<sup>2</sup>で、淡路島とほぼ同じ面積である。小さな国ではあるが、人口は約561万人である。人口密度は世界第二位で、民族は中華系、マレー系、インド系が大多数を占める多民族国家である。そのため、中国語、マレー語、タミール語、英語の4つが公用語となっている。宗教においても、仏教、イスラム教、ヒンズー教などがある。

日本とシンガポールの関係は、第二次世界大戦時における日本占領下の昭南島時代の悲劇から始まる。国内のあちらこちらには記念碑があり、シンガポールの人々は、当時の出来事を決して忘れてはいない。しかし、現在の人々は日本を友好国として受け入れ、経済発展のパートナーとしてとらえている。シンガポールの人々は「許しましょう。決して忘れまい」というスタンスで日本人と接している。現在では、日本企業は約1550社がシンガポールに進出し、在留邦人数は約3万6千人である。

このシンガポールに、日本人学校小学部は2校ある。チャンギ校に約950人、クレメンティ校に約800人通っている。2校ともに在外教育施設の中でも大規模校である。たくさん子どもたちが南国の多文化共生の国、シンガポールで学んでいる。子どもたちは、日常的に多言語・多民族に触れる機会が多くあり、国際理解教育の取り組みを展開するには最適な環境で生活している。国際理解教育での学びを実践する場が豊富に存在している。子どもたちは自ずと、シンガポールでは人権や多様性が尊重されることを知ることができる。

保護者や教員は、子どもたちがシンガポールでの経験やチャンギ校での学習によって、将来、グローバルな社会で活躍できる人材に育つことを強く願っている。

## 2. シンガポール日本人学校小学部における英語教育

シンガポール日本人学校小学部では、楽しい少人数授業「使える英語」を目指して、学習指導要領に規定された学習内容だけでなく、シンガポールだからこそ実践できる独自のカリキュラムで授業を行っている。

現地校交流、ホームステイ、ネイティブ教師による水泳や音楽の英語イマージョン教育（英語で学ぶ授業）などをはじめ、習熟度別少人数授業による英会話教育に力を入れている。母語である日本語をしっかりと学ぶことで思考力を伸ばし、日本人としてのアイデンティティーを確立させながら、将来世界で活躍するために不可欠な「使える英語」の習得を目指している。

英会話教育の基本内容は両校共通である。総勢15名（両校合わせ計30名）の英会話スタッフが1年生～4年生は週3回、5・6年生は週4回の授業を担当している。

英会話のクラスは習熟度別に12段階に分けている。クラス編成は、授業での取り組みの様子やスペリングのテストから各学期のはじめに判断している。新入生や編入生は最初の数回の授業の様子でクラスが決定される。教師の多くはネイティブスピーカーが担当している。教科書「Hi Friends」を使用し、多角的なアプローチにより総

合的な英語力をつけることを目標にしている。保護者との連携を深めるため英会話の授業参観が定期的に行われている。また、学期ごとに担当教師が英語で書いた成績表を出している。

### 3. シンガポール日本人学校小学部における国際理解教育

国際理解教育の目標は「豊かな表現力を身につけ、シンガポールの中で様々な文化に進んで関わろうとする子どもの育成」である。全学年に、現地校との交流が年間計画の中に位置付けられている。訪問しての交流・招待しての交流と計2回実施される。現地校との交流は「英語」で行われるため、英会話スタッフに協力を得ながら、交流に必要な言葉や表現を身に付け、当日の活動に臨んでいる。現地に訪問しての交流は、現地校の計画・進行で行われる。実際に訪問して、現地校の教諭の説明を聞きながら交流を深めていく。2016年度の1年生はエライヤスパーク校と学校交流をした。両校の代表児童による挨拶に続いて、ダンスを踊った。

その後、KutiKutiという日本のおはじきに似たゲームを楽しんだ。相手校のパートナーとの英語でのやりとりが楽しくて、会場には笑顔が溢れていた。

#### (1) 実践例 1年生（エライヤスパーク校を招待しての交流） 2016年度

##### ①前日までの準備3時間

- ・（1時間目）エライヤスパーク校の子どもたちと交流が始まることを知る。  
エライヤスパーク校の子どもたちとも積極的に関わろうとする意欲や態度を育てる。
- ・（2時間目）名刺交換の英語表現を覚えよう！手裏剣を作ろう！  
基本的な挨拶表現を知り、積極的に関わろうとする意欲や態度を育てる。
- ・（3時間目）手裏剣の作り方を覚えよう。手裏剣の的を作ろう！  
手裏剣の作り方を覚え、交流本番の時に、エライヤス校のお友だちに英語で教えられるようにする。

##### ②当日の流れ（手裏剣の作り方と手裏剣遊び）

英会話スタッフが日本語と英語で、以下のような説明をしながら進める。

<司会>今からみんなで手裏剣を作ります。手裏剣は throwing stars や ninja stars と英語ではよばれており、忍者が使うものでした。忍者は侍時代のスパイで、手裏剣は彼らの武器です。折り紙で手裏剣を作った後は、手裏剣を使って遊びます。頑張って仕上げましょう。先生が作り方を教えてくれます。よく見て作りましょう。エライヤス校のお友だちでわからない人はチャンギ校のパートナーに聞いてください。

（作成後）みなさん、手裏剣が完成しましたか。

では今から手裏剣を使って遊びます。各グループごとに1列に並んで、順番に手裏剣を投げます。当たったところの得点をしおりに書き込みましょう。全部で3回投げます。各学校が交互になるように並んで、グループで1列を作ります。

（手裏剣を的に向かって投げる）終わったグループからその場に座りましょう。点数の多い人に拍手をしましょう。



#### (2) 他学年の交流 2016年度

##### ①2年生 エライヤス校との交流

訪問しての交流では、自己紹介後、CIMOダンス（シンガポールダンス）、インドの伝統的な模様の塗り絵、扇子作りを行った。招待しての交流では、チャンギ校の校舎を案内したほか、英語とマレー語で歌った「シンガプーラ」を披露したり、折り鶴を作った。日本とシンガポールの友好50周年の節目の年であったので、鶴を折ることを通して平和についても一緒に考えた。

### ②3年生 テマセク校との交流

訪問しての交流では、障害物リレーや民族衣装塗り絵を楽しんだ。仲が良くなった友だちからメッセージ入りのカードをもらうことができた。招待しての交流では、3年生が日本の駒や剣玉などの伝統遊びを英語で説明した。遊びのお世話をしながら、相手の目を見て説明をした。

### ③4年生 テマセク校との交流

訪問しての交流では、名前や好きなものなどの自己紹介、カード交換、体を動かしてのゲームや塗り絵などの交流を行った。招待しての交流では、グループごとの福笑いやチーム対抗の玉入れを行った。チェッコリの音楽に合わせての玉入れは、大変盛り上がった。

### ④5年生 イーミン校との交流

訪問しての交流では、日本人学校では馴染みのないキャンティーン（食堂）で軽食を食べたり、ヒップホップダンスと一緒に踊った。また、Zero pointやChapteh、5 stonesという伝統的な遊びを体験した。招待しての交流では、綱引きや剣玉、駒、切り紙といった日本の伝統的な遊びや物作りを一緒に行うことを通して、交流を深めた。また、保護者の協力のもと、12名の子どもたちが互いの家を行き来するホームステイも実施した。

### ⑤6年生 イーミン校との交流

訪問しての交流では、キャンティーンで飲食したり、剣玉やしおり作り、ミニゲームなどの活動に参加し交流を深めた。招待しての交流では、スクールツアーとしてイーミン校の子どもたちに学校内の施設を紹介した。和室に興味を示したイーミン校の子どもたちに、一生懸命、練習した英語表現を使って説明した。また、凧作りや習字の活動を通して、日本文化を伝えた。

どの学年の子どもたちも、はじめは緊張している様子が見られていたが、次第に雰囲気慣れ、英語での会話や説明を意欲的に行っていた。交流後には「もっと英語で話したい！」という声がたくさん聞かれている。

これまでに学習した英語表現を実践的な場面で使うだけでなく、積極的に互いの文化に触れ合うことができた。学校交流を通し、異文化を体験し、シンガポールの同年代の子どもたちがどのような生活を送っているのか知ることができ、有意義であった。

## 4. シンガポール日本人学校小学部における英語イマージョン教育

### (1) 英語イマージョン教育の指導教科

英会話の他に英語で学習するイマージョン音楽を各学年週1～2時間、イマージョン水泳を各学年週1時間実施している。イマージョン音楽では、各学年の標準指導時数の半分をネイティブの音楽教師が指導している。また、イマージョン水泳は体育科の標準授業時数のうち年間30時間を水泳学習に充てて、シンガポールスイミングクラブの指導員2名が英語で指導している。

### (2) イマージョンの歴史とその背景

イマージョンとは、immersion: 浸す（される）こと；没頭、はまり込むことを意味し、1965年カナダ、ケベック州モントリオールの幼稚部でフランス語による最初のイマージョン授業が始められた。70年代に入って米国でスペイン語のイマージョンプログラムの開発に成功した。

イマージョンプログラムのねらいは、2か国語で話す・聴く・読む・書くことができるように推進することである。教師は「英語を教える」のではなく、音楽を「英語で教える」のであり、子どもたちは音楽を楽しみ、学びながらその過程で英語を習得していくのである。そして、英語に没頭（イマージョン）することをねらっている。また、ネイティブの先生との会話を通じて自然な言い回しや表現を身につけることもねらっている。

### (3) 英語イマージョン教育の実際（1年生）

#### ①イマージョン水泳

“Good morning, boys and girls!”

“Good morning, Mr.Chen and Ms.Charissa!”

この挨拶から、イマージョン水泳の授業が始まる。男女一列ずつに並び「1ワン、2トゥー、3スリー、4フォー！ 5ファイブ、6シックス、7セブン、8エイト！」元気なかけ声で準備体操が始まる。その後、シャワーを浴び、ビート板を持ってのバタ足、息継ぎの仕方と、スムーズに授業は流れる。



“Do slow strokes.” “Kick on the count of 3.”などの指示も1年生の子どもたちは理解できている。日本の学校から編入したばかりの子どもは、日本の水泳授業とは違ってハイペースで進む授業に、初めのうちは戸惑う。しかし、年間を通して水泳の授業ができるので、泳ぐ距離がぐんぐん伸びるようになる。また、先生に質問をしたり、授業の最後におしゃべりをしたりして、会話をするにも慣れる。

#### ②イマージョン音楽

「1ワン、2トゥー、3スリー！」Ms.Carolのかけ声で、1年生の子どもたちは鍵盤ハーモニカで“Happy Days”を弾き始める。“One more time!”先生の手拍子や身振りで、1年生も指示が理解できている。また、教室の後ろで一列になり、“Londonbridge is falling down, falling down…”を歌いながら先生の腕のアーチの下をくぐり抜ける遊びをしていた。チャイムが鳴ると、“Thank you Ms Carol and Ms Yong!”と笑顔で言い、子どもたちは帰っていく。

イマージョン教育の成果は、7月の音楽発表会や2月の水泳記録会で発揮される。それぞれの技能と英語力の伸びと共に、英語での表現やコミュニケーションを楽しむ姿などが見られる。

## 5. おわりに

私は、3年間のシンガポール日本人学校チャンギ校への派遣が終わり、平成27年3月に帰国した。派遣の3年目の年には外国語活動推進担当となり、現地校との連絡や調整を行った。これまでに培われてきた実践や現地校との良好な関係があり、年間計画通りに進めることができた。子どもたちは、シンガポールでの生活や国際理解教育の授業の中で「偏見や差別をしてはいけないこと」を知ることができたのではないと思う。

しかし、国際理解教育の目標は、戦争、貧困、開発、差別、人権、環境など地球的規模の様々な問題に「気づき考える」ことや自分にできることを「実行する」ことである。この段階には、これまでの年間計画では到達できていないと思われる。年間計画を見直す時期に来ているのではないかと考える。

今後は、地球的規模の様々な問題に対して、自分にできることを「実行する」というプロセスが学習内容の中に組み込まれた計画をしていくことが望まれる。このような参加体験型・課題解決型の学習を通して、「多文化共生の理念」を育み、平和で公正な地球社会作りに「参加する態度」を養うことを目的としたい。多文化共生の国「シンガポール」。国際理解教育での学びを実践する場が豊富に存在している国だからこそ、こうした高次元な目標も達成できると考える。今後もチャンギ校の国際理解教育の展開に大いに期待したいと思う。